
真夏の雪女 - 人形師 源十郎 -

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の雪女 - 人形師 源十郎 -

【Nコード】

N6890I

【作者名】

” 太った猫 ”

【あらすじ】

人形師源十郎シリーズ第6話 今度のヒロインは雪女

神裂く剣 巻（前書き）

人形師源十郎シリーズ第6話 今度のヒロインは雪女

神裂く剣 壱

刃など断たなかった。

完膚無きまでの敗北、それが得られた唯一のものだった。

剣は碎け、盾は割れ裂け、その補佐としてあるべき少女のカタチを模した人形は、為す術もなく己が主が崩折れるのを見ていた。

暗転、夢は脈絡も無く流転する。

それは、戦闘と呼べる代物ではなかった、それを的確に表現するならば、一方的な暴虐、容赦なきまでの蹂躪の爪跡、死した者こそ無いが、まごうと無き凌辱の足跡であった。

「累て、無為、累累、やはり無為、無策、無思慮」陰韻とした声に、誘われるように群がる銃弾

「不惑…」意識外からの攻撃を難なく打ち落とす。「あれに殺気など、殺意など無かった。当然か、認識すらされておらぬのだから…、今の私と同じ…」それは、唇の片方をつりあげ、新たなる目標を視界のはるか外に認める。そうして新たなる蹂躪が始まった。

吉の剣 1

それは、真夏の出来事であった。びようびようと吹きすさぶ冷風、虫の鳴く声すら騒々しいとも思えないほどの勢いで窓をたたき、雪礫、その季節外れの局地的な雪嵐の中、それは居た。

「能登 源十郎だな」それは否定を許さぬ発言であった。

その身に纏うは、白い装束一枚、合わせ目から覗く豊かな胸元は、青白ささえ帯び、色気と言うより、死の抱擁すら匂わせる。

主に突きつけられるた一振りの剣は、無骨の一字で表せるほど、切り裂くという行為にのみ特化していた。

「主様、申し訳ありません。侵入を許してしまいました」緋色の巫女が申し訳なさそうにその背後に佇む。

「気にすることは無い、役目故、貴様らには感知されぬという特典を初代より、与えられておる」底冷えする声は、冷風となって神風おんなに吹き付ける。

発する声は冷徹、その佇まいは、常人なら気圧されずにはいられない。

壱の剣 2

「その容姿すがた、そのお声、まさしくおのお方とურიふたつ、お待ちした甲斐ががあり申した」

目の前に冷然として立つ女が、不意に蕩とうけるような声を出したかと思えば、刃を納め、膝をつき、三つ指をついたかと思えば、

「沙耶さやと申します。不束者ふつつかものですが、未永くよろしくお願い致します。
「言い、深々と頭こぶしを垂れる。」

「ちよーっと待ったあ」最初に呪縛から解放されたのは、少女の形をした人形、神無かんなだった。「これは、いったい全体どういうことか、きつちり説明して下さい、源十郎様っ」

「あら、元気の良いお嬢ちゃんね、この私の冷眼まなぬしに立ち向かえると
は」再び、冷気が、部屋を満たし始める。

「…沙耶と言ったな、口伝は伝わっている。ということはお前が納めるべき刀身やいばは、どこだ」ぼつとした、口調で今し方まで刃を突きつけられていた青年が言葉を発する。

「旦那様、野暮なことをお言いですね。妻の秘密には目をつぶるべきではありませんか」女は冷然としたまま言い放つ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6890i/>

真夏の雪女 - 人形師 源十郎 -

2011年10月1日00時52分発行